

成田市天神峰中央所在野馬土手(2)

— 主要地方道成田小見川鹿島港線事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29年12月

千葉県教育委員会

なりたし 天神峰中央所在野馬土手(2)

— 主要地方道成田小見川鹿島港線事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 22 集として、千葉県成田土木事務所の主要地方道成田小見川鹿島港線事業に伴って実施した成田市天神峰中央所在野馬土手（2）の発掘調査報告書です。調査成果としては、江戸幕府直轄の佐倉牧のうち、矢作牧に関わる野馬土手と溝の一部を検出し、周辺の調査事例と合わせ、矢作牧の様相を知る上での貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成 29 年 12 月

千葉県教育委員会

文化財課長 萩原恭一

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部成田土木事務所による主要地方道成田小見川鹿島港線事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
天神峰中央所在野馬土手（2） 成田市天神峰字中央 155-45 ほか（遺跡コード 211-086（2））
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の依頼を受け、平成 28 年度と平成 29 年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の担当者、調査期間等は以下のとおりである。

平成 28 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 田井知二

担当者 主任上席文化財主事 田島 新

文化財主事 牧 武尊

実施期間 平成 29 年 2 月 20 日～2 月 28 日

平成 29 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 萩原恭一

発掘調査班長 山田貴久

担当者 文化財主事 垣中健志

- 5 本書の執筆・編集は垣中が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、成田市教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、同成田土木事務所、成田市三里塚御料牧場記念館はか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第 2 図 國土地理院発行 1/25,000 地形図「成田国際空港」「下総滑川」「佐原西部」「成田」

平成 22 年を縮小編集

第 3 図 成田市役所発行 1/2,500 成田市都市計画図 平成 3 年測量を編集

第 6 図 參謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「大里村」を拡大編集

- 9 図版 1 の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 48 年 3 月撮影のものを使用した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と矢作牧.....	2
第2章 調査の成果.....	4
第3章 総括.....	8

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 千葉県内の近世牧位置図.....	2
第2図 矢作牧位置図.....	3
第3図 周辺地形図と調査地点.....	5
第4図 調査区平面図.....	6
第5図 トレンチ断面図.....	7
第6図 迅速測図と調査地点.....	9

図版目次

図版1 航空写真 (S=1/10,000)	
図版2 遺跡遠景・遺跡近景・トレンチ1	
図版3 トレンチ2・トレンチ3	
図版4 トレンチ4・周辺環境・周辺の野馬土手	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

主要地方道成田小見川鹿島港線（以下「県道」とする。）は、成田市から香取市を経て、茨城県神栖市に至る主要地方道である。成田国際空港と鹿島臨海工業地帯を結ぶ重要な機能を担う幹線道路であり、空港平行滑走路の北伸や鹿島港の埠頭開発に伴い交通需要は増加しており、道路拡幅・歩道整備などを目的に路線の整備が順次進められている。この道路整備計画の実施に当たり、平成22年度に千葉県印旛地域整備センター成田整備事務所（当時）から千葉県教育委員会に対して「埋蔵文化財の取扱いについて」の協議があり、千葉県教育委員会では現地踏査結果を踏まえ、事業計画地内に野馬土手が所在する旨の回答を行った。そしてこの回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は調査対象1,866m²に対して平成29年2月20日に開始し、同月28日に現場作業を終了した。整理作業は平成29年度に実施した。なお、本事業に関連して、平成24年度に今回の調査対象区の500m西側の地点（以下「前回調査地点」とする。）で、公益財団法人千葉県教育振興財團によって野馬土手と溝の調査が行われ、『成田市天神峰中央所在野馬土手』（文献①）として報告書が刊行されている。

2 調査の方法と経過

発掘調査 調査対象の遺跡は近世牧の野馬土手であり、工事範囲内に幅約7m、高さ約2mの高まりとして遺存している状態であった。土手の西側は、土手に沿って低く凹んでいることから、野馬堀を伴った野馬土手であることが想定された。事業者による樹木伐採後、掘削作業前に地形測量を実施した。前回調査地点でも、野馬土手や土手に伴う溝を検出していることから、調査区でも土手と付随する溝を検出するため、確認トレンチを土手に直交する方向に3本と、調査区南側で南北方向に1本設定した。トレンチの掘削に当たっては重機を使用した。トレンチ内で検出された遺構は野馬土手の一部と2条の溝で、溝の覆土を取り除き完掘したが、遺物は出土しなかった。検出した溝については東からSD-001・SD-002と呼称した。記録作成は光波測距儀測量による平面図を作成し、遺構断面図については手実測により行った。写真撮影はデジタルカメラ（Raw・JPEGデータ）とともに、6×7モノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラにより実施した。調査終了後、トレンチ内を重機で埋め戻し、現場作業を終えた。なお、旧石器時代包蔵地ではないため、下層確認調査は実施していない。

整理作業 調査図面・写真的記録整理後、現場図面の鉛筆トレース・修正を行った。報告書では、現場でトレンチ1としたものをトレンチ4、トレンチ4としたものをトレンチ1とした。また、写真図版候補写真を選出し、仮レイアウトを行った。その後、デジタル編集によって現場図面のトレース、挿図の作成、写真原版の補正を行い、写真図版を作成した。その後、原稿を執筆し、原稿・挿図・写真図版をデジタル編集によってレイアウトし、編集・校正作業を経て、報告書を刊行した。

第2節 遺跡の位置と矢作牧（第1～3図、図版1）

今回の調査対象となった近世牧の野馬土手は、成田市天神峰字中央地区に位置し、根本名川の支流である取香川に開析された支谷の最奥部北側に広がる標高約40mの台地平坦部に立地する。台地北側の谷津の水田面までの比高は約8mである。千葉県内には江戸幕府直轄の牧として小金牧・佐倉牧・嶺岡牧が所在しており、この地点は佐倉牧のうちの矢作牧^{注1)}に当たる。今回の調査の遺跡名は、前回調査地点と同じ字名であることから、前回調査地点と区別するために「天神峰中央所在野馬土手（2）」とした。

矢作牧は佐倉牧の中で最も大きい牧である。矢作牧の範囲は、現在の香取市、成田市、多古町に及び、中心は成田市と多古町の十余三地区である。「矢作牧龜絵図」（綿貫家文書）では、牧が野付村（吉岡・大室・小泉・野毛平・長田・堀ノ内・取香・一鍬田・飯籠・高津原・檜・出沼・澤・横山・前林・一坪田村）に囲まれた様子が描かれ、牧士根本鉄之助の「手控帳」によると、牧の周囲の歩数は598万740歩とされる。文献²⁾では矢作牧の野馬土手49か所（総延長18,970m）の現存が確認され、文献³⁾では絵図や迅速測図、発掘調査成果等を総合的に分析し、牧の範囲が東西13km、南北10.5km、外周93.4km、面積39.7km²に及ぶと推定されている。なお、明治維新後、新政府の政策による牧の畑作農村化により、矢作牧は13番目の開拓地として、十余三（とよみ）と名付けられた。

矢作牧における発掘調査は、矢作牧の南西部に当たる地点が成田国際空港建設に伴って広範囲にわたって実施されている〔第2図⑦⑧〕。調査前に土手はほとんど削平されており、溝状遺構として野馬堀が検出されている。また、古込込前遺跡（空港No.22遺跡）〔第2図①〕では矢作牧の捕込跡が測量調査され、4つに区画された長方形（80m×70m）の構造が明らかにされた。「矢作牧捕込図」（島田家文書）とは内部構造が異なり、時期による変化を捉えられる資料として重要である。十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）〔第2図⑦-2〕では馬の埋葬土坑が良好な遺存状態で検出されている。前回調査地点〔第2図⑪〕では、調査区の東側と西側、南側に土手があり、南側の土手と平行して東西方向に3条、西側の土手と平行して南北方向に2条の溝が検出された。溝の覆土からは硬化面が確認されたことから、土手に伴う溝が通路として機能していたと考えられる。また、現存する土手の下部からも溝が検出されていることから、野馬土手と土手に伴う溝が何度も改修されたことが推測できる。



第1図 千葉県内の近世牧位置図



第2図 矢作牧位置図

第2章 調査の成果

調査区内の野馬土手は、樹木の繁茂が著しいものの遺存状態が良好に見えた。北西から南東に延びる野馬土手の土手部北端と南端は1mほど標高が高くなっていた。一方、調査区の西側はほとんど平坦で、調査区外にも傾斜は見られない。確認トレンチは調査区の東側に野馬土手と直交するように3本設定した。また、前回調査地点で、県道に沿って東西方向に延びる溝が検出されたことから、調査区の南側にも県道に接する形で南北方向のトレンチを1本設定した。その結果、南北方向に延びる溝と東西方向に延びる溝をそれぞれ1条検出したが、野馬土手については調査区にある大部分が現代の造成による改変を受けていたため、一部を確認するにとどまった。

野馬土手（第4・5図、図版2・3）

第4図の地形測量図は10cmごとの等高線で表示した。野馬土手の構築状況の確認と野馬堀を検出するため、トレンチ1・2・4を設定した。トレンチ2・4を見ると、いずれも土手は多量の碎石やロームが混入した土により盛土されたものであった。また、野馬堀が想定された場所も深く掘削され、碎石などが混入した土により埋め戻され、上部にはアスファルト敷の道路が造成されていた。これらのことから、トレンチ2・4の部分では、野馬土手と野馬堀は現代の造成によって消滅していたことが明らかになった。トレンチ内の土手は北に続く土手より1mほど低くなっている。トレンチ内の土手の盛土は本来あったと考えられる野馬土手の盛土も再利用していると考えられるが、トレンチから野馬土手に関する遺物は出土しなかった。

一方、トレンチ1では、西側は現代の道路造成によって削平されていたものの、野馬土手の一部を確認することができた。2層はしまりがなく軟らかな土であり、3層は比較的よくしめられた土で構成されていることから、2層が土手の盛土で、3層が土手の基礎であったと考えられる。土手を構成するいずれの層からも、野馬土手構築時の遺物やそれ以前に遡る遺物は確認できなかった。

なお、調査区外の北側には北西に向かって土手が続いており、県道を挟んだ調査区外の南側にも南東に延びる土手と、土手に沿って低く凹んでいる部分が現存することから、調査区周辺には野馬土手や野馬堀が良好に残されている可能性が高い。

S D - 0 0 1 (第4・5図、図版4)

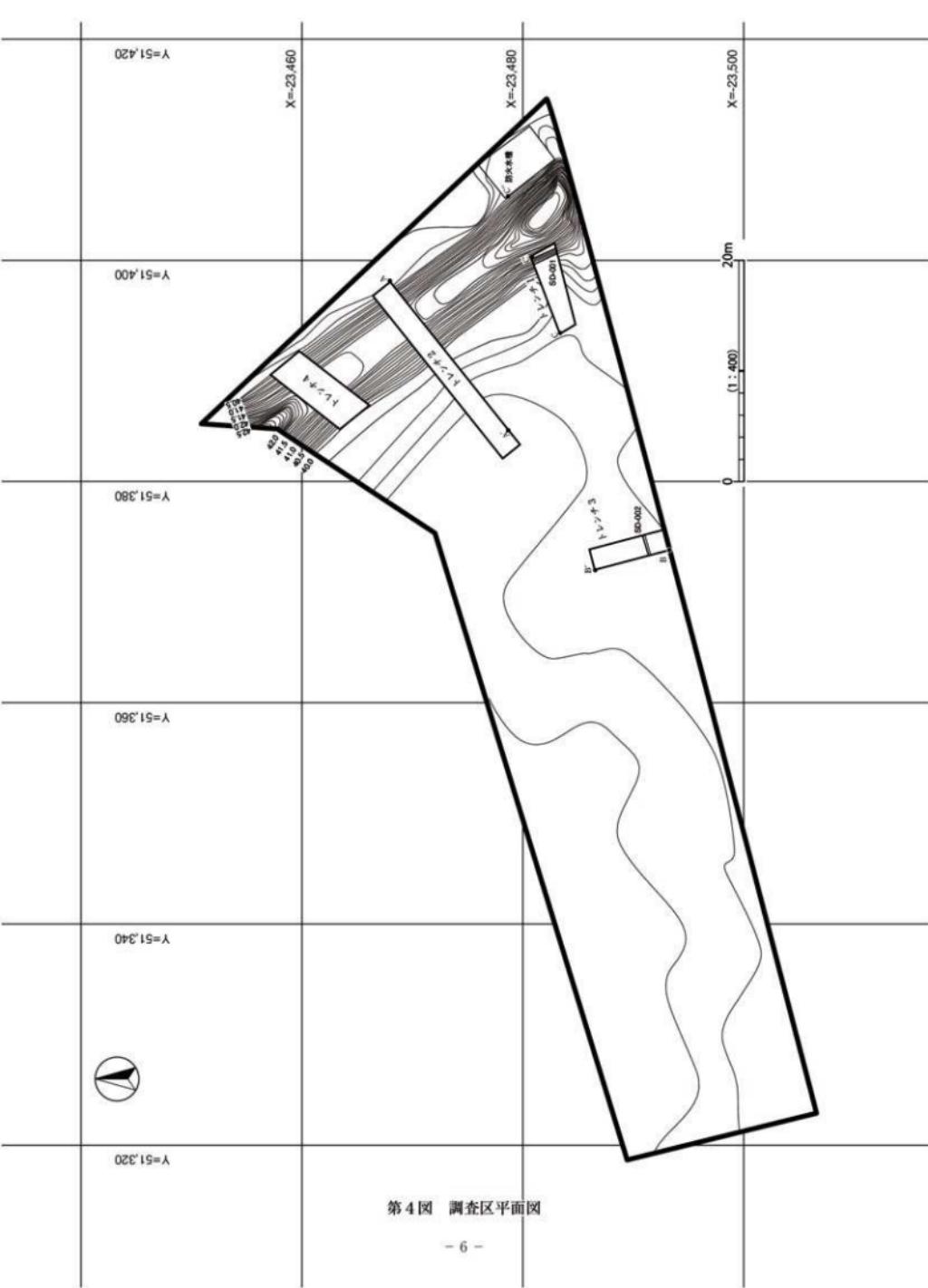
トレンチ1の下層に南北方向に延びる溝を検出した。溝の規模は、深さ8cm、幅64cmである。掘込みは浅く、底面断面は皿状である。覆土中に硬化面は確認できなかった。野馬土手の盛土の下層から検出されたことから、現存する野馬土手の構築以前の溝と考えられる。覆土から遺物は出土しなかった。

S D - 0 0 2 (第4・5・6図、図版3)

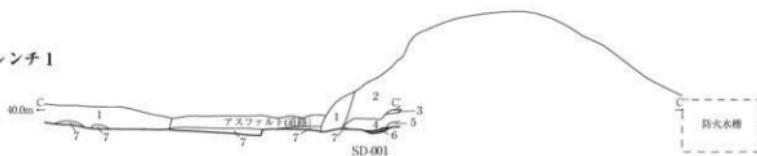
トレンチ3の南側に、県道に沿って東西方向に延びる浅く広い溝の一部を確認したが、全体を検出することができなかつたため規模は不明である。2層はしまりのない土で、迅速測図にある道路（現在の県道）の造成に伴う排土の可能性がある。溝の覆土は3層から6層でいずれもしまりが非常に強く、6層で硬化面を確認した。6層で硬化面が確認されていることから、溝として機能するとともに、通路としても利用されていたと考えられる。覆土から遺物は出土しなかった。なお、前回調査地点でも東西方向に延びる溝が3条検出され、いずれの溝でも下部に硬化面を確認していることから、溝としての機能とともに通路としての役割も果たしていたと考えられる。



第3図 周辺地形図と調査地点

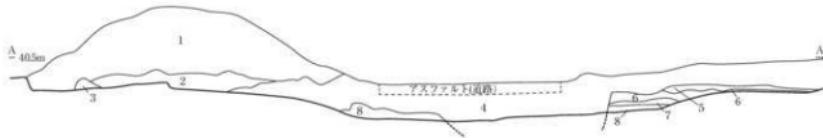


トレンチ 1



1. 表土層：カクラン。
 2. 黒褐色土：しまりなし。土手の盛土。
 3. 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック極少量含まれる。土手の基礎。
 4. 黒色土：旧表土層か。
 5. 黑褐色土：テフラ粒多量含まれる。
 6. 暗褐色土：しまり強。ローム粒多量含まれる (SD-001覆土)。
 7. 褐色土：ソフトローム層 (Ⅲ層)。
- *C-C' は野馬土手の上端ライン。

トレンチ 2



1. 黒色土：しまりあり。木の根、砕石、ロームブロック含まれる (現代の盛土)。
 2. 黑褐色土：しまりなし。ロームブロック多量含まれる。
 3. 黄褐色土：粘性あり。砕石含まれる。ロームブロック多量含まれる (現代の盛土)。
 4. 黑黃褐色土：表土層。カクラン。
 5. 黑褐色土：赤色・橙色・黒色粒含まれる。旧表土 (Ⅱa層か)。
 6. 暗褐色土：赤色・黒色粒含まれる (Ⅱb層か)。
 7. 褐色土：赤色・黒色粒含まれる。一部軟質化。ソフトローム層 (Ⅲ層)。
 8. 褐色土：黒色・赤色粒・白色微粒含まれる。
- 上部は一部軟質化。ソフトロームとハードロームが混在 (Ⅲ-VI層)。

トレンチ 3



1. 表土層：カクラン。
 2. 黒色土：しまりなし。近代以降の堆積。
 3. 黑褐色土：しまり非常に強い。ローム粒少量含まれる (SD-002覆土)。
 4. 暗褐色土：しまり非常に強い。ローム粒・ロームブロック多量含まれる (SD-002覆土)。
 5. 黑褐色土：しまり非常に強い。ローム粒含まれる (SD-002覆土)。
 6. 暗黃褐色土：しまり非常に強い。ローム粒・ロームブロック多量含まれる。
- 下面是硬直化している (SD-002覆土)。
7. 黑褐色土：旧表土。
 8. 褐色土：ソフトローム層 (Ⅲ層)。

0 (1 : 100) 5m

第5図 トレンチ断面図

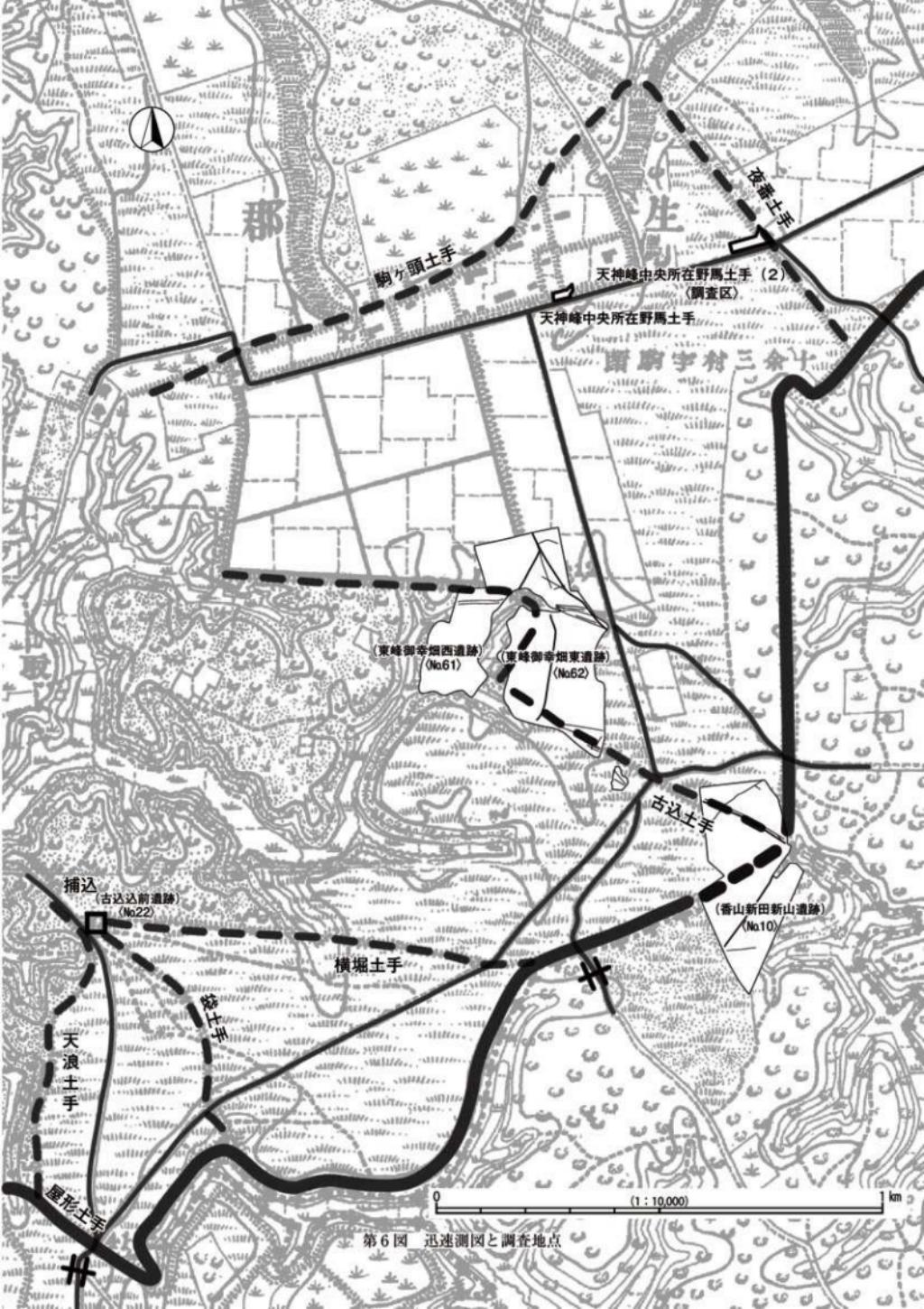
第3章 総括

今回の調査区は矢作牧の南西部に当たる。調査対象は北西から南東に延びる野馬土手1条であったが、土手部を確認トレントで3か所断ち割ったところ、土手は現代の造成により改変されていたものの、トレント1で野馬土手の盛土と基礎部分を検出できた。また、土手の下部から土手に平行して南北方向に延びる溝SD-001と、県道に沿うように東西方向に延びる溝SD-002を1条ずつ検出した。遺物は出土しなかった。SD-002は、前回調査地点で検出された3条の溝と同様に東西方向へと延び、覆土に硬化面が確認されていることから、3条のうちいずれかと同一の溝であると考えられる。前回調査地点の溝と同様に、SD-002は野馬土手に伴う溝であった可能性が高く、硬化面を有するため通路としても利用されていたと考えられる。

調査区の野馬土手は夜番と呼ばれる地域にあることから、近世矢作牧の勢子土手である夜番土手であったと考えられる。夜番土手の総延長は409間（約748m）、高さ2間（約3.6m）、幅3間（約5.4m）であった^{注2)}。この史料によると、夜番土手は寛政4年（1792年）に修復願が出され翌年に修復が行われているが、その際に土手の幅が2間半（約4.5m）に縮小されている。このように、野馬土手は破損するたびに修復され、土手の規模も破損状況によって変化することがあった。土手の修復によって土手に伴う野馬堀や溝が掘り直されることもあったと考えられる。今回の調査で検出された野馬土手が近世のどの段階のものかは未詳であるが、土手の基礎の下部から検出された溝も、近世の野馬土手に伴う溝であった可能性がある。野馬土手や土手に伴う野馬堀、溝の改修、牧内の道の実態などについて、発掘調査の成果と史料を照合することによって明らかにし、野馬土手の現状を正確に把握していく必要がある。

注1) 矢作牧及び周辺遺跡の内容については下記文献を参照した。第2図は下記文献①の第27図を元に作成し、矢作牧内の調査地点Noと下記文献Noに対応している。

- ① (財) 千葉県北總公社 1971「三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査」
 - ② 北總東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団 1978「佐倉七牧－矢作牧の調査－」
 - ③ (財) 千葉県文化財センター 1987「小六遺跡」「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－大栄地区（2）－」第124集
 - ④ (財) 香取都市文化財センター 1996「桜田野馬土手跡」
 - ⑤⑥ (財) 香取都市文化財センター 2001・2002「旧矢作牧野馬土手」「事業報告X・XI」
 - ⑦ (財) 千葉県文化財センター 2003「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅨ－香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）十余三稻荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）－」第447集
 - ⑧ (財) 千葉県文化財センター 2004「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅨ－東峰御幸畑東遺跡（空港No.62遺跡）－」第483集
 - ⑨ 成田市教育委員会 2008「旧矢作牧野馬除土手跡（多良見地区）」「平成19年度成田市内遺跡発掘調査報告書」
 - ⑩ (財) 印旛都市文化財センター 2011「千葉県成田市旧矢作牧野馬除土手－官林赤道整備事業に伴う埋蔵文化財整理委託－」第294集
 - ⑪ (公財) 千葉県教育振興財團文化財センター 2013「成田市天神峰中央所在野馬土手」第713集
 - ⑫ 千葉県教育委員会 1986「牧」「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」
 - ⑬ (財) 千葉県教育振興財團 2006「矢作牧」「県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡」
- 注2) 酒々井町 1976「丑年（寛政5年：1793年）御用日記」「酒々井町史 史料集（二）」



第6図 応急測図と調査地点

写 真 図 版

航空写真 (S=1/10,000)

天神峰中央所在馬主手(2)





トレンチ2 (北側から)



トレンチ3 (北側から)



トレンチ3 (南側から)



報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第22集

成田市天神峰中央所在野馬土手(2)

—主要地方道成田小見川鹿島港線事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成29年12月22日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1
印 刷 株式会社正文社
千葉市中央区都町1-10-6
